竜姫伝説の滝

紫 李鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

願いを叶えるために、若者は幻の滝に挑んだ。

目次

前編 …… 1
後編 …… 6

前編

その山には、竜に身を変えた美しい姫が棲むと伝えられる幻の滝があった。
その滝を見つける事ができたら、願い事が叶うという噂を耳にした人々は、挙って挑んだ。
だが、そこまでの道は険しく、誰もが悉く脱落し、引き返した。
仮に辿り着いたとしても、その場で行き倒れ、野垂れ死にしたであろう。
何故なら、一人として、竜姫を見たという話を旅の土産にした者はいなかったからだ。

薫風の頃だった。絵図を片手に、一人の若者がその幻の滝に挑んだ。
峨々たる山岳を目印に、密林に囲まれた険路を行き、深い森に着いた頃には、もう既に日が落ちていた。
山の夜は寒く、先刻まで汗ばんでいた体の熱を急激に奪った。

腰に結んだ薄衣を羽織ると大木にもたれた。
笹の葉に包んだ握り飯を頬張り、竹筒の水を飲むと、徐に目を閉じた。

キュ〝ーキュ〝ー

鳥とも獣とも区別がつかない鳴き声が漆黒の闇を切り裂いていた。
若者は僅かに瞼を開けたが、闇に動く物はなく、すぐに目を閉じると眠りについた。

――空が白むと同時に、腰を上げた。

高木に閉ざされた闇の森は、僅かばかりの天空を覗かせていた。
得体の知れない魑魅魍魎（ちみもうりょう）が蠢（うごめ）く気配の中で、若者は腰の刀に手を置きながら、その見開いた眸（ひとみ）を目指す方に向けていた。

ガサッガサッ……

深閑の森には、若者の歩みで擦れる草木の音だけがあった。

やがて、天空が開けると、

パサッパサッ！

生い茂る草の中から、一羽の鳥が飛び立った。

若者は一瞬ギクッとすると、蒼天に羽ばたく鳥を見上げた。

間もなく、何やら音が聞こえた。

それは、足を進めるに連れて、音を激しくした。

尚も進むと、

グゥオーーーーー！

けたたましい瀑声が起こった。
「あっ、滝だっ！」
若者は、草木で傷付けた血の滲む足を軽快に踏んだ。

グゥオーーーーー！
叢(くさむら)を行き、雑木林を抜けると、更に瀑声が轟いた。やがて、蒼天に、紅紫の遠山が眺望できる崖下に、滝が白煙の如く、飛沫を上げていた。
若者は、辿(たど)り着いた喜びに、その凛々(りり)しい顔を綻(ほころ)ばせた。

流れる沢を辷(すべ)ると、滝壺のほとりに下りる事ができた。

ゴゥオーーー！
洪水の如く激流を落とす滝は、滝壺のほとりに咲き乱れる百花繚乱(ひゃっかりょうらん)の花々を涼しげに揺らしていた。
若者は、瀑声に閉ざされた世界で、只管(ひたすら)、滝壺を凝視していた。
白い飛沫は生き物のように暴れ、今にも飛び上がらんばかりであった。

思い付いたかのように竹筒に滝の水を汲むと、渇いた喉に流し込んだ。
「ゴクッゴクッ……」
と、その瞬間(とき)だった。

ウ〝オーーー!

滝の音とも、獣の啼き声とも区別がつかぬ音が聞こえた。
若者は慌てて水を飲み込むと、目を見開いた。
そこにあったのは、前方から向かって来る白い大蛇(みじろ)だった。
あまりの驚きに、若者は声を出す事はおろか、身動ぎすらできなかった。

後編

大蛇は若者を襲わんばかりの勢いで目前まで来ると、大きな黒い瞳を若者に据えた。
若者が目を凝らすと、それは大蛇ではなく、白い竜であった。
「何奴！」
男とも女とも区別のつかないこもったような声が竜のほうから聞こえた。
「とう、藤吉郎と申す」
藤吉郎と名乗る若者の声は震えていた。
「我が滝に、何用じゃ」
「ね、願いが叶うと聞き……」
「願いだと？……どんな願いだ？」
「母上の病を治して頂きたく――」
「何っ！自分のためではなく、母親のためにここまで来たと申すのか？」
「は、はあ」

「偽りを申すな。自分の欲以外で、ここまで来た者はおらぬ」
「偽りではございませぬ。わたくしは貧しき武士の子。それ故に、薬を手に入れる事もままなりませぬ。……母上の病を治してあげたいのです」
「むむ……強情な。そちの本性を暴いてやろうぞ。いま、そちに向こうて飛ぶ。身をかわす事なくば、そちの願いとやらを叶えてやろう」
「……」
我が身に起こるであろう災禍に、恐れ戦(おのの)きながらも、藤吉郎は身を硬直させると、歯を食いしばった。
竜は、天に昇るが如く飛び去ると、蒼天に白き羽衣のように靡(なび)いていた。
藤吉郎は天を仰ぎ、ギュッと目を瞑(つむ)ると、胸元で合掌した。

やがて、疾風のように何かが向かって来る〝気〟を感じた。だが、固く目を閉じ、更に強く歯を食いしばり、只管(ひたすら)、祈り続けた。

ヒューーーーーッ！
途端、風が疾(はし)るような音が、藤吉郎の耳元を過ぎて行った。

徐(おもむろ)に目を開けると、先刻まで聞こえなかった滝の音が、鼓膜を突き破らんばかりに襲った。

ゴゥオーーー!

辺りを見回すと、竜の姿はなく、百花繚乱の華美なる光景が広がっていた。

「夢を見ていたのであろうか……。いずれにせよ、願いは叶わぬか……」

藤吉郎は肩を落とすと、来た道を戻った。

村に続く、九十九折(つづらおり)の山道を下っている時だった。色鮮やかな衣を身に纏(まと)った若い女が蹲(うずくま)っていた。

藤吉郎は小走りになると、女の元に急いだ。

「どうなされた」

声をかけた藤吉郎に振り向いた女の容姿は、実に美しかった。

「……足を、……くじいて」

女は、水色の脚絆(きゃはん)に巻かれた脛(すね)を擦っていた。

「それは難儀な。……よければ、わたくしの背に」

「そのような……」
　女は羞(は)じらうように頬を染めた。
「どちらに参られる」
「幻の滝に――」
「駄目じゃ！行かぬほうが身のためじゃ」
「……何ゆえに」
「文字通り、幻の滝だからです。……滝など、どこにもありませぬ」
　竜に殺されるやも知れぬと危惧(きぐ)した藤吉郎は、女の身を案じ、嘘をついた。
「……」
「さあ、わたくしの背に。……道を戻りましょう」
「でも、……はい」
　女は菅笠を結び直すと、躊躇(ためら)いがちに藤吉郎の背に身を置いた。

　竜姫伝説には、まだ続きがあった。
　愛する男に裏切られた竜姫は、この世に真などない。人間は心を変えるもの。本当の愛も、綺麗な心も、人の世にはない。そう嘆いて幻の滝に身を投げ、命を絶ったと言う。
　そして、竜に貌(かたち)を変え、幻の滝に棲みついていると。

だが、真実の愛と、真の心に出会えたならば、生き返り、人間に戻る事ができると言う。

藤吉郎の背に負われた女の名を、〝お竜〟と言った。――

完